屋島の誉　吉水錦翁　作

去る程に
那須の与一宗高は
君の仰せをかしこみて
たくましげなる黒駒の
手綱かいぐり悠々と
波打ち際に乗り出す
此の時宗高十七歳
心のうちに思うよう
かかる晴れなる場所に出で
若しも此の矢を過らば
弓切り折って割腹し
言いわけせんと思ひつめ
扇の的を見渡すに
矢ごろ仲々遠ければ
駒の胸がい尻がいも
濡るるばかりに静々と
乗り入れたれど其のあわい
尚まだ遠き浪路をば
北風烈しく吹きすさみ
磯打つ波も高ければ
駒ははやりて狂えるを
手綱ゆりすえゆりすえ鎮むれど
鎮まり兼ぬる駒の足
扇と共に定まらず
宗高じっと目をとじて
南無八幡大菩薩
那須の湯泉大明神
宇都の宮の大権現
弓矢の冥加あるべくば
国の御為源家の為
扇を射落させ給えとて
心をこめてぞ祈りける
この念力や通じけん
磯吹く風も音絶えて
駒も扇も静まりぬ
宗高こころ勇み立ち
鏑矢番えて引きしぼる
源氏の兵声々に
今少し打ち入れ給え
打ち入れ給えと呼ばわるを
更に耳にも聞き入れず
矢声をかけて切って放つ
矢音は浦に鳴り渡り
要際よりふっつと射切る
屋島潟　入る日の影に鳴る弾の
響きは高し　波の果てまで